3. 家塾から尚絅女学会、尚絅女学校へ

3.1　家塾の開始とバイブル・ウーマン

尚絅学院の創立は 1892(M25)年である。しかし、その誕生前の産みの苦しみの時代のあったことを忘れてはならない。

1890(M23)年 9 月、米国北部バプテスト教会の西部女性外国伝道協会(WBFMSW)から派遣され、仙台を拠点に活動していた女性宣教師ファイフ、フィリップス、ミードの三人は、五城館の隣家に住んでいた。五城館というのは、教育会館として建てられた洋風の建物で、現在の青葉区新伝馬町・東三番丁にあった。

女性宣教師たちは、その隣家を活動拠点にして少女たちを同居させ、共同生活をしながら女子教育を行なった。そして、自分たちの宣教活動を補助する日本人の女性伝道師、いわゆるバイブル・ウーマン(Bible Woman)と呼ばれる女性たちの養成に取り組んだのである。これが後に「尚絅女学会」に発展する家塾(Christian Girls' School Home)の始まりである。

バイブル・ウーマン

バイブル・ウーマンとは、女性宣教師の助手として伝道活動に協力する日本人女性のことである。女性宣教師が訪問伝道をする際にバイブル・ウーマンを伴うことは、まだ流暢とは言えない宣教師の日本語力を補うという点においても、土地勘のない『外国の町』を歩く宣教師のナビゲーターの役目を果たすという点においても、そして外国人の戸別訪問を突然受ける日本人に、安心感を与えるという点でも、大変有効であった。特に婦人や子どもたちへの伝道においては、バイブル・ウーマンを活用することは有益であり、成果を上げることができたようである。

小林孝男
『主のみ旨のみが実現する』尚絅総研出版会
2015 年

翌 1891(M23)年 2 月、この小さな家塾の拡充のために、彼女たちは五城館のあった場所から新坂通・北二番丁突き当りの旧山田邸（現宮城県知事公館敷地内）を借り受けて、新しい広い住居に移り住んだ。

しかし、バイブル・ウーマン養成が軌道に乗りつつあったにもかかわらず 1889(M22)年にブラウン、1891(M24)年 4 月にフィリップスが、9 月にはファイフも仙台を離れ、残されたのはミードだけだった。誕生し、軌道に乗りかけた家塾は今や風前の灯となった。残されたミードはどんな思いで先輩宣教師たちを見送ったことだろう。

3.2　尚絅女学会の創設

一人で家塾の管理と運営にあたらなければならなくなったミードは、他の学校を歴訪し調査し、教師陣を集めて翌年再起に出た。久保寺豊太郎、下甲子郎という日本人の協力者を得たことも幸いしただろう。今や消えそうになった家塾を寄宿学校の形式に整え、私塾として復活させたのである。1892(M25)年 8 月「尚絅女学会」の誕生である。

Mead, Lavinia,
(1860–1941)

「尚絅女学会」
1892 年創立

ミード(左)とブゼル(右)

産声をあげた尚絅女学会に設置されたのは、キリスト教の信仰と女性の教養を授ける普通科(Academy Course)と、バイブル・ウーマン養成のための聖書科(Bible Training Course)の二科であった。最初の生徒は五人から十人だったようである。

その後も苦労は絶えなかったようであるが、何がミードをそこまで突き動かしたのであろうか。それは遠いアメリカの地から船でやってきて、言葉も文化も全く違う異国日本の東北の地で、自由とか平等とか権利といったことを全くと言っていいほど知らない幼く若い女子たちに対する、キリストの愛の実践であったといってよいだろう。

この創立したばかりの尚絅女学会の運営のために、同年 11 月に来日した A.S.ブゼルが加わった。ミードとブゼルの二人三脚による活躍がここから始まった。尚絅学院はこの 1892(M25)年を創立年としている。

翌 1893(M26)年 9 月、尚絅女学会は中島丁に移転した。旧山田邸では手狭になるくらい女学会が発展してきたからであろう。この移った場所が、広瀬町で現在の尚絅学院中学・高校の体育館とグランドのあるところである。

3.3 エラ・オー・パトリック(Ella O. Patrick)

中島丁に移転したとはいえ、そこは宣教師の住宅の一部を借りて、一階を教室兼寄宿舎、二階を女性宣教師の居室として使用したいわば仮の校舎であった。増築もしたようであるが、それでも十分な広さではなかった。

以前から、ミードとブゼルは母国の教会や信者たちに手紙を送り、尚絅女学会の独自の施設建設のための支援（献金）を求め続けていた。そして、その願いが現実のものになったのが、1896(M29)年に竣工したエラ・オー・パトリック・ホームである。尚絅独自の最初の新築の校舎がこれである。この建物については、後述されるのでそこに任せたい。ここでは、建物の名前の由来となったエラ自身について記しておこう。

Patrick, Ella O.
(1846.2.28–
1892.11.12)

エラは、1846 年 2 月 28 日にアメリカ合衆国はニューヨーク州の裕福な家庭に生まれた。父親は厳格で信仰深く、母親は慈愛に満ちた人であった。このような両親に愛され育てられたエラは、キリスト教の信仰によって神を愛し人を愛する人間に成長していった。しかし、彼女の一生は「痛みと共に生きる生涯」であった。

2 歳の時、エラは重い熱病に罹り、腹部に腫瘍ができた。それは脊髄の近くにも生じ、しばしば激痛を発した。歩行も困難となり、一生治らなかった。しかし、自分の病のために介護をしてくれる母親の苦労を少しでも軽くしたいと心がけ、また、自分の苦しみを他の人に感じさせないように、できるだけ快活に振るまい、喜んで社会人としての義務を果たし、病床にある時も人を喜ばせることを忘れなかったようである。学校には通えなかったが、両親に支えられながら独学で勉学に努め、優秀な成績を修めた。

21 歳の時にイリノイ州に移住し、生涯をそこで暮らすのであるが、エラは教会の働きだけでなく、社会福祉活動にも取り組んだ。さらに、世界伝道事業に対しても多大な関心を抱き、そのために出来る努力を惜しまなかった。シカゴにある WBFMSW の書記になったときは、日本の女子教育に深い同情を抱いていたに違いない。もし健康に恵まれていたなら、おそらく海外伝道に身を投じ、宣教師として日本にやってきていたことだろう。

エラは 46 歳で生涯を閉じるが、最後の二年間は耐え難い苦痛の連続だった。しかし、それに耐え続けた。医者は麻酔剤の服用を勧めたが、エラは受け入れなかった。朦朧とした意識の中で天に召されるのではなく、はっきりした意識を持ちながら、召される日を迎えることを望んだからであった。

しかし、医者がいよいよ臨終の近いことを宣告した時、友人たちは少しでも痛みを和らげるために麻酔剤の服用を彼女に懇願した。エラはこれを受け入れた。しかし、その前に親しい人たちを枕元に集め、楽しい会話のひと時を過ごし、讃美歌を数曲共に歌った。そして、青年と教会のため、伝道協会のために祈り、世界に神の正義が実現することを祈り、友人のために祈り、最後に自らを神に委ねる祈りをささげたあと、皆と挨拶をかわしてから麻酔剤を服用したという。1892(M25)年 11 月 12 日、エラは苦しみから解放されて天に召された。

ちょうど、この二日後の 11 月 14 日、WBFMSW から派遣された宣教師ブゼルが日本の横浜港に上陸した。海外伝道に対する強い思いと志を持っていたエラの身代わりにブゼルがなったのだという人もいた。

その後、エラの父親は若くして死した愛娘の遺志を継いで、尚絅の新校舎建築のために多額の金額を寄付された。それを建設資金の貴重な一部として建てられたのが、尚絅の最初の校舎である。そして、この校舎は「エラ・オー・パトリック・ホー

ム」と呼ばれた。献堂式以降「尚絅女学会」のことを英語で“Ella. O. Patrick Home”と表すようにもなった。

現在、ゆりが丘キャンパスに移設復元されたこの建物を見上げ、中に身を置く時、尚絅に連なる私たちは、エラの信仰と情熱を思い起こしたい。

3.4 尚絅女学校の設立と国家主義的教育との対立

1899(M32)年、私塾であった尚絅女学会は尚絅女学校の設立認可願を提出し、11 月 24 日、宮城県知事より私立学校令に基づく設立認可を受けた。学校創設者としてミードとブゼルの両名が署名し、初代校長にはブゼルが就任した。以来、尚絅学院は 11 月 24 日を創立記念日としている。

尚絅女学校
1899(M32)年
11 月 24 日設立認可

ところで、「私立尚絅女学校」が認可されるときに、尚絅は厳しい選択を迫られた。

明治初期には国の欧化主義を反映してキリスト教については寛容であったが、天皇制の下での教育勅語に基づく国家主義的教育とキリスト教教育の対立が次第に顕在化してきたのである。そのために国は教育と宗教の分離政策を取った。そして、1899(M32)年 8 月 3 日、「文部省訓令第十二号」が発令された。

文部省訓令第十二号
一般ノ教育ヲシテ宗教外ニ特立セシムルノ件

一般ノ教育ヲシテ宗教外に特立セシムルハ学政上最必要トス依テ官立公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許ササルヘシ

明治三十二年八月三日

これにより尚絅女学校は、創立時から厳しい三つの選択肢に直面した。

1) 一切の宗教教育を認めないこの指令に従って、聖書の教育と校内での礼拝を止めて、つまりキリスト教の理念を放棄して、文部省の認可と上級学校への進学資格付与権を取得する。
2) 廃校にする。
3) 従来通り聖書を教科として残し、礼拝も継続するという教育方針を貫いて、つまりキリスト教的伝統を維持するが、学校制度としては「各種学校」に甘んじてとどまる。

尚絅女学校は、最も困難な第三の道を選択した。その後、上級学校への進学資格を文部大臣から受けるのは 1910(M43)年 1 月まで待たなければならなかった。

関東学院、明治学院、青山学院などもこの道を選択した。他方、麻布中学校は、第一の道を選択した。

3.5 ミードの離仙

尚絅女学会を立ち上げ、ブゼルと二人三脚で歩んできたL.ミードであったが、1902(M35)年、尚絅女学校認可後三年にして仙台を去っている。その間の詳しい事情については記録がない。

ただ、1895(M28)年に大火傷を負う事故があり、女学会の具体的運営や活動についてはブゼルが主に担当するようになったことと、それまで一貫してバイブル・ウーマン養成のための女子神学校を構想してきたミードにとって、聖書科に入学する生徒が少なかったことは、尚絅を辞する遠因になったかもしれない。

しかし、ミードはその後数名のバイブル・ウーマンを伴って山口県の長府に赴いた。さらに下関そして大阪で女性宣教師として働き続けた。1908(M41)年には、彼女によって大阪市に「バプテスト女子神学校」が創設されている。現在そこは「社会福祉法人キリスト教ミード社会舘」(大阪市淀川区)となって社会福祉活動を広く展開し続けている。

ミードは1926(T15)年7月に帰国、1941(S16)年10月9日に天に召された。81歳だった。